

## 信仰の両側の姿

### マルコによる福音書6:1～13

すべてのことには、両面が存在しています。見る目に良い姿だけでなく、そうでない姿も存在しています。これは信仰や教会の歴史でも同じです。教会が今の姿を備えるまでは、多くのことが起こってきました。教会は、イエスさまに従うということで迫害を受けましたが、キリスト教はますます復興し、結局、史上最大の帝国の国教になりました。大きな平和と力を得ましたが、時間が経つと、教会は争って分裂しました。戦争を起こしたこともありました。しかし、改革と反省を通して変えられ、教会は、世界の多くの国、特に、アジアまでも福音を伝えました。それで、今のように私たちも、イエスさまについて知り、礼拝をささげることができるようになりました。

今日の福音書は、このことを扱っています。いわゆる信仰の両側の姿といってもよさそうです。今日の福音書は、大きく二つに分かれています。一つは、1節から6節までの言葉であり、もう一つは、7節で13節までの言葉です。最初の言葉である1節から6節までの言葉で、イエスさまは良くない事をされました。否定され、排斥され、あざ笑いを受け、さらには奇跡も行われませんでした。恥を受けたといっても過言ではないと思います。二番目の言葉である7節から13節までの言葉では、イエスさまは、すべてのことを回復なさいます。以前のように奇跡がイエスさまの御言葉を通して起こり、イエスさまに派遣された弟子たちは、驚くべきことを引き起こします。しかし、5節では、「何も奇跡を行うことがおできにならなかった」と書かれています。この言葉は、イエスさまが権能を妨げられたことがあるということであり、この言葉は、いくらでも話題になることもあると思います。もちろん、すぐ弟子たちに与えられた権能を通して奇跡が起きましたが、一瞬間でも、神の子の権能が行われなかったのです。なぜマルコによる福音書の著者は、この話題になれるの記事を書いたのでしょうか。イエスさまの権能に限界があるということでしょうか。

まず、このことが起こった場所がどこなのかをみましょう。1～2節の言葉です。「イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。『この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。』」イエスさまは弟子たちと一緒に故郷に行かれました。そして安息日に行かれた故郷の会堂で、話題になる出来事が起こりました。イエスさまの故郷の人々は、イエスさまの教えと奇跡に驚いて、イエスさまがどこからこのような知恵と奇跡を得たのかを不思議に思いました。皆様、このような人々の反応が何かおかしいとは思いませんか。人々はイエスさまの知恵と奇跡を「得た」と思いました。

一般的に、イエスさまの奇跡は公的な生涯と共に始まったとされています。では、イエスさまの故郷の人々は、イエスさまの奇跡を経験したことがないのでしょうか。だから、イエスさまの奇跡については驚くことがあると思います。しかし、人々はイエスさまの教えについても驚いて、その教えさえも得たものだと思います。それでは、イエスさまは公的な生涯の前には、会堂で教えたことがなかったのでしょうか。でも私は、イエスさまが公的な生涯の前にも、故郷の会堂で神さまの言葉を教えたことがあると思います。2節に「会堂で教え始められた」と書かれていますが、このことは、イエスさまが以前にも会堂で教えたことがあるという意味でもあります。先週、会堂長やイロの話を上上げて、会堂長の仕事についても少し言及しましたが、会堂長は礼拝を準備し、司る人です。つまり、会堂長は、人々に認められたラビや教師を選抜して、会堂で神さまの言葉を教えさせました。だから、イエスさまが会堂で教えられたというのは、すでにイエスさまは、会堂長からその週の安息日に教えることを頼まれたということで、解釈することができます。会堂長の願いがあったというのは、以前にも会堂で教えたことがある可能性が高いからです。そして、人々はその週の安息日にイエスさまの教えを聞いて驚きました。イエスさまが何を教えたかについてはよく

分かりません。しかし確かなことは、その教えが過去のイエスさまの教えとは違ったというのです。人々は、驚いてイエスさまが知恵と奇跡を得たと思うほどだったからです。

しかし、このことは、イエスさまにとって良くないことになってしまいました。人々はすぐ過去のイエスさまのことを思い出しました。そして、イエスさまの家族を語り、イエスさまにつまづきました。イエスさまを受け入れないことにしたのです。イエスさまはこのことを残念に思われたようです。4節にこう書かれています。「イエスは、『預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである』と言われた。」そして、そこでイエスさまは、ごくわずかの病人だけを癒されることができ、そのほかは何も奇跡を行うことがおできになりませんでした。

私だけでなく、信者にとっては、イエスさまが何もおできにならなかったということは、驚くべき大きな衝撃であるでしょう。特にイエスさまを受け入れない人の前で、イエスさまは何もなさいませんでした。ところが、なぜマルコによる福音書の著者は、この事を記録しておいたのでしょうか。もしイエスさまに限界があるなら、隠す方が良かったでしょう。しかし著者は、イエスさまの失敗のようなこのことを書き、イエスさまが人々の不信仰に驚かれたことも書きました。それでは、この福音書が示したいことは何でしょうか。イエスさまの限界を教えてくださいませんか。そうではないでしょう。何か他の目的があると思います。

初代教会の人々は、矛盾のような状況に置かれていました。彼らが聞いたり読んだりしているイエスさまの言葉には、信じられないほどの奇跡と福音の勝利が記録されていました。しかし、彼らの現実は違いました。彼らは彼らの社会から迫害を受けていました。ただ、ある程度の差はありました。ある場所は迫害が激しくて、ある場所はそんなに激しくありませんでした。教会の成長もみんな違って、奇跡が起こることも違いました。ある教会は迫害があっても成長しましたが、ある教会は迫害が激しくなくても衰えました。ある教会は迫害から離れていましたが、冷たくもなく熱くもない教会となりました。このようないろいろな状況は、初代教会の信者の信仰を揺らして、かい離に陥らせたと思います。このような彼らにとって、今日の福音書は、大きな力になってくれたと思います。イエスさまもおできにならないことがあったということを、私たちとは違って受け入れたでしょう。私たちにとっては大きな衝撃ですが、彼らにとってイエスさまの失敗は、慰めになったかもしれません。迫害と失敗によって無力感に陥った初代教会の信者たちは、イエスさまもおできにならなかったことがあるということに同感したと思います。

私たちの信仰生活でも同じでしょう。いつも良い面だけがあるのではないでしょう。いくつかの理由によって、私たちの信仰が揺らぐ時があり、鬱になる時もあります。こんな時、私たちは神さまに不満を持ったか、信仰について疑ったりすることもあります。このような私たちを慰めてくれるのは、奇跡や勝利のメッセージだけではないでしょう。偉大な預言者たちも、いろいろなことによって揺れ、元気を失うことがあったという言葉が私たちを慰めることがあります。彼らも私たちと同じだったということ、そのような彼らを神さまが慰められ、回復されたということが私たちに新たな希望を与えます。

今日の福音書が伝えている、何もおできにならなかったイエスさまの姿は、確かに成長できず、無力感に陥っている初代教会に大きな慰めを与えたでしょう。しかし、これですべてが終わるわけではありません。今日の福音書の二番目の部分である7節から13節までの言葉で、イエスさまは、以前のように奇跡を行なわれます。イエスさまは付近の村を巡り歩いてお教えになりました。そして、弟子たちを呼びよせて遣わし、悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒させました。これも信仰の片側です。慰めだけでなく、回復と成長、福音の勝利は、私たちの信者といつまでも共にあります。今日の福音書は、信仰の両側の姿を私たちに示しています。苦難と勝利、病氣と癒し、慰めと復興は、この両側の姿を通して、私たちに真の信仰が何なのかを教えてください。この御言葉を通して、信仰のバランスを取る皆様になりますように。神さまの慰めと復興が皆様と共にありますように主の御名によって祈ります。アーメン